史蹟史料部主催　スンゲイブロー湿地保護区バスツアー報告

　2026年10月31日（土）にシンガポール北西部にある湿地に総勢46名でのバスツアーを行いました。スンゲイブローは、ジョホールの街並みを臨むマングローブ林、干潟、淡水のため池があり、そこに集まってくる渡り鳥などの動物を観察できる貴重な自然保護区となっています。自然友の会から清水寛子さんと私の2名が案内役、日本人会スタッフ両頭真衣さんが同行し、2班に分かれて散策しました。2か月にもわたるヘイズの影響で催行が危ぶまれましたが、数日前から状況は改善し晴天に恵まれました。朝8時に日本人会に集合して出発。バスの中で初めてスンゲイブローに散策に行く方をお尋ねしたところ、ざっと8～9割くらいの方の手が挙がり、わくわく遠足気分が高まりました。

　ウエットランドセンターに到着後、私の班は、ギャラリーのパネルで、渡り鳥とは、どこで繁殖して越冬するのか、その通り道、くちばしの違いや日本とシンガポール間よりさらに長距離を移動する飛行能力等をご紹介。これから見られるだろう動物などもパネルでざっと見ていただきました。その後、淡水池に移動し、マングローブ後背林の大型のシダであるマングローブファーン、料理の香りや色付けに使われる小型のパンダン、着生ランであるバルボフィラム・メデューサエが咲いている様子をご紹介しました。ウエットランドセンターの天井を見上げると、犬の顔に似た大きな目をもつフルーツバットが休んでいました。名前の通り果実や花の蜜や花粉を主食とする、空飛ぶ哺乳類のコウモリです。



マングローブファーンのご紹介



着生ラン



フルーツバット



オオバヒルギの胎生種子

その後、旧橋であるルックアウトポイントに移動し、スンゲイブロー川でサギ類の鳥と魚を観察しました。参加者の方が、川岸に向かって泳ぐイリエワニを見つけてくださって、全員で撮影タイムとなり、無事ハイライトの一つをカメラに収めることができたと思います。NParks スタッフの話によりますと正確な数は不明だそうで対岸のジョホール州の開発に伴ってこちらにやってきたケースもあり増加傾向、20～30頭以上はスンゲイブロー周辺に生息しているそうです。そして、洋ナシのようなオオバヒルギの若い果実が、親木の枝についたまま発芽成長し始めている独特な形態を観察しました。これを胎生種子と呼びます。



旧橋での観察タイム



イリエワニと魚を狙うゴイサギ



サバヒーの群れ



ハーフビーク



現橋から旧橋方面を眺めて

また、ハーフビーク、テッポウウオ、サバヒー、ティラピア、水面から飛び上がるボラなどの魚を観察できました。水位が程よい高さだったため、肉眼で観察できる状況となり、参加者の皆様同士で確認し合う姿が見られました。

次に橋を渡り、渡り鳥トレイルに入り、ゴバンノアシの花と実を観察しました。

大型で美しい花は、夜咲きで翌朝には落ちてしまいますが、なにより「碁盤の脚」のような実と、かつては種子をすりおろして魚毒として使われていたことが面白いという声があがりました。そして世界最大級のトカゲの一つである若いマラヤンウォーターモニターがトレイル上に登場。人間をも捕食対象とするコモドドラゴンと異なり、おとなしく臆病な爬虫類、とご紹介するものの、恐ろしい、と反応する方多数。初めて遭遇した方もいらっしゃったようです。



ゴバンノアシの葉、花と実



マラヤンウォーターモニター



インドトキコウ

マッドロブスターの塚を見ながらさらにトレイルを進むと、遠くにインドトキコウやダイサギが見えました。そして、ここでも参加者の方が鳥見ハイド脇にイリエワニが潜んでいるのを見つけて、至近距離での迫力のある姿を観察することができました。トレイルの両側にあるフェンスは、イリエワニが増えてから地際（下部）を狭くして、侵入を防いでいるなどのエピソードも交えながら咬む力が最強であることをご紹介。そして、マングローブの呼吸根は、様々な形があり、酸素が乏しく潮汐の影響を受ける厳しい環境で生き抜くための工夫であることなどをお話ししました。海岸線の浸食を防ぎ、津波などの衝撃を緩衝する天然の防波堤でもありますね。

そして、汽水域に生息するニッパヤシの未熟な種子は、アイスカチャンの中の半透明で歯ごたえがある楕円形のアタップシードであることをご紹介。早速ローカルかき氷を食べに行きたいとお話しされる方がいらっしゃいました。続いてウラジロヒルギダマシの半胎生種子の中身を観察してみました。

橋にもどりハイビスカスや街中で街路樹としてお馴染みのイエローフレームの花を眺め、対岸のジョホールの街並みを臨みました。シロガシラトビもさっそうと上空を渡っていきました。



ダイサギ



鳥見ハイドから観察



至近距離のイリエワニ



マッドロブスターの塚



JB の街並み

後半、マングローブボードウォークに入って、スンゲイブローの名前の由来となった、タケを見ながら進んでいきました。熱帯のタケは、株立ちとなるものが多く日本で目にするものと異なり「タケに見えない、迫力あるね～。」という声が上がりました。

ボードウォーク中ほどに差し掛かり、みなさん自らが直径約2～3cm ほどの小さなカブトガニの幼生を見つけて、周りの方に伝達してくださり、次々に歓声が上がりました。「思っていたよりもかなり小さくて、石ころが動いているみたい。」と驚かれていました。マッドスキッパーや貝なども見られ、盛り上がりは最高潮に達しました。そして、砲丸のような実をつけるホウガンヒルギの花が咲いている中を進みました。大きく張り出した支柱根や気根、鮮やかな赤いガクに太くて短い胎生種子をつけるオヒルギも観察できました。



タケ



カブトガニを探す様子



カブトガニの幼生



ホウガンヒルギの花



マッドスキッパー



大きく張り出した支柱根と垂れ下がる気根





上段：オヒルギの胎生種子
下段：コモンエメラルドダブ

和やかな散策も終盤にさしかかり、大きく枝を広げたシーアーモンドの木陰を歩いていると、参加者の方が「林床を歩き回る鳥がいますよ。」と教えてくださいました。見ると、光沢のあるエメラルドグリーンの翼と鮮やかな赤いクチバシを持つ美しいハトの仲間、コモンエメラルドダブで、順番に観察していきました。

そして、ウエットランドセンターに戻りました。そこで清水さんの班は、イリエワニは、4頭も見ることができたと報告がありました。



イリエワニを観察する清水さんの班



渡り鳥トレイルを歩く清水さんの班



枝を広げるシーアーモンド



参加者の皆様との記念撮影

帰りのバスでは、心地よい疲れからうとうとされる方が多数見られました。
日本人会館に到着後はお弁当を受け取り、和やかな歓談タイムとなりました。

今回は初めてスンゲイブローを訪れた方が多数を占めていましたが、皆様が自ら動植物を見つけて声をかけてくださったおかげで、案内役の私自身も大いに助けられました。動物たちが想定以上に私たちの前に姿を現してくれたこともあり、案内役からの一方通行ではなく、皆様と一緒に作り上げるツアーとなりました。大変充実した楽しい時間を共有できたことに、心より感謝しています。

スンゲイブローは、シンガポール政府が、かつてエビ養殖場であったエリアを守り続けている貴重なナチュラルヘリテージです。今回の散策ツアーが、小さな国土の中でもこれほど豊かな生態系を体験できることへの驚きとともに、かけがえのない自然の未来に思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

【案内役】 自然友の会：清水寛子　高田真奈美
【日本人会スタッフ】 両頭真衣
【画像】 史蹟史料部
【文責】 高田真奈美